

いよいよ三十八度線突破の時は、南に見える小高い山に向かつて走りましたが、その時もソ連兵につかまるところを農民に教えられて難を逃れました。ぶじ西岸の海域に到着し、駅前の掃除をさせられましたが、京城まで汽車に乗ることができました。同胞のお世話で民家に止めてもらい、翌日、宮崎県の人を探していると聞き申し出ますと、(母を連れて帰ってくれ)と言われ、竜山より汽車に乗り、釜山より仙崎に上陸し、日本の土を踏むことができました。

お婆さんを高鍋町で下ろし、台風の関係で三日間宮崎市に足踏みして、十一月十日に帰郷できました。当時は就職する所はなく、在外同胞引揚者協会の事務員として、引揚げ者の援護業務にたずさわりました。敗戦当時の引揚げ者の辛苦は想像に絶するものがあり、終生忘れ得ません。引揚げ者に対する二回にわたる特別交付金支給業務も私が担当し、今も引揚げ者の老後の幸福のために心を配っています。

## タバコ売りして

神奈川県 坂元 安雄

満州に生まれ育った者の根なし草の生活は、敗戦と同時に泥にまみれました。特に引揚げ後はわずかに持ち帰った家財で、間仕切った引揚げ寮の一部屋での落ちつかない共同生活、いも、かぼちゃ、ふすまの食事と飢餓感にさいなまれた経験は強く刻みこまれています。特別な苦労とはいえません。昭和二十三年三月、本籍地鹿児島に引揚げ、子どもの私は、その翌日から食を求め、ヤミ市場をうろつき、母子家庭として、なんとか生活をやっていかねばとする気持が第一でした。

街角で立ち売りしている手巻きタバコを見たとき、大連でタバコを商売にしていた経験がこれより上手にうまいタバコをつくることができると自信がわき、急いで家に帰ってきました。

うれしくなって「お母さん、商売を見つけてきたよ」

「なんの」と母の問う顔と同時に同じ部屋の人びとの顔がいっせいにこちらに向けられた。小学校を仮卒業したばかりの生意気盛りの私は得意顔で「タバコ売りだよ」と言った。その瞬間、母の顔色は変わり、周囲の人びとは猜疑の目を向け、静まりかえった。

「何を言っているの、内地ではタバコは専売制で勝手に商売すると罪になるのよ」と怒声だった。内地の事情への無知の結果だった。

当時は「戦争反対」「平和主義」「男女同権」等の言葉が流行し、入学して新制中学校では自治会活動が活発化した。学校の中では、方言一掃の日本語の標準語教育の強化、ある地方では、ローマ字による教育すら実施されている頃で、鹿兒島弁にためらいを持っていた友達の間を九州なまりの満州標準語で話しまくり、昔からの習慣や土地のしきたりを理解することなく、自分にとって不つづな場合「封建的」の一言で切り捨てたものでした。

昔からの土地の習慣、方言の持つ歴史性、必然性、その土地の中から生まれ育った文化や習慣、また普通の日本人なら常識とされていた行事等まったくといって良い

ほど、私は無視してきました。

結婚し、妻が農家出身であったため、はじめは義理のようにして参加した妻方のお盆、正月、法事等を通じて、私自身の亡父の法事、母への感謝としての祝い事のすべてを置き去っていたことを思い知らされた。更に私達子ども一同がそのような事柄にいいさい気をまわすことなく、本籍地である鹿兒島は住みにくいと母を一人残して東京周辺に集まってきていたのです。

なぜあんなにまで苦勞して、正月、お盆に帰省ラッシュの中日本人は故郷に帰るのか。年に一度父母、親類が一同に顔合わせ、そのぶじを互いに喜びあい、また来年に向かって生きる張り合いを持つ行事として、テレビを見ながら理解はしたつもりでもその奥にある人を愛してみたいせつにする本質を知ることなく、一方では冷たい目でテレビを見ているのが植民地育ちの満州坊主の本性ではないかと私を含めて兄弟の姿の中に見えています。どこか異邦人的存在になっているのです。

引揚げてから六年鹿兒島に住み、その初めの頃、特に中学校への登校路上で、よく目にし、耳にした挨拶に

「おやとさー」の言葉があります。道で知り合いの人びとが声を掛けあい、また別れる時も「おやとさー」と一声軽く頭を下げながら去っていく光景なのです。それが親しい人びとの間では朝夕区別なく使われているのです。母に「おやとさー」の言葉の意味を聞くと「御苦労様」ということだと教えてくれました。しかし住み慣れ、聞きなれるに従って、「御苦労様」という一言の色ではない言葉、文化性では言い表せないものを感じたのです。

鹿児島島のシラス地帯で不毛で米も少なく、いもや雑穀を主食として暮らすには決して豊かと言えなかった風土と歴史の中から、人が互いに生きて行く上でのいたわりと、励ましの思いやりのある言葉であったのです。

在郷の間に私もいつとはなしに「おやとさー」の挨拶ができるようになりました。しかし根なし草の満州坊主には言葉の真似だけで、時と場所、相手などに合わせて心にひびいてくる根づいた「おやとさー」は、使えませんでした。

故郷を逃げ出し、外地と雰囲気の合う生活を求めて上京し三十余年、青春を共にした故郷の友達からふと電話

で「おやとさー」と呼びかけられたり、会って語り合うときなど、そのすばらしさを今頃感じつつも心にへだたりを重く感じています。一つの言葉が持つその文化性、土着性に対して第三者的立場、異邦人としての宿命のようなものを意識しています。最近の流行語になっている日本人の国際人化という言葉には新しい型の根なし草を生み出すのではないかと危惧を持っています。

## 中共、強制抑留の思い出

宮城県 相馬 勉

昭和二十年八月、ソ連軍北滿に侵攻してきたとき、私はハルビン機関区に在勤しており、安東方面派遣要員として自宅に待機していたが、安東・牡丹江方面の戦況が悪化し中止となった。その後、ハルビン地区も緊迫した状況となり、自宅前にはざん壕が掘られ、軍より手榴弾が支給され、家族自決用として毒薬を準備し、死を覚悟してソ連軍の来襲に備え八月十五日終戦を迎えた。